

第五章

青少年と生涯学習

⑨ 生涯学習における少年教育の推進

1 生涯学習としての少年教育の特徴

少年(少女を含む)とは、少年法では満二十歳に満たない者、児童福祉法では小学校就学から満十八歳までをいうが、生涯学習の観点からは、義務教育年齢の範囲の者をさす場合の方が一般的である。

もちろん、そういう義務教育年齢の子どもたちにとって、組織的な教育の最大の場合は、学校である。しかし、生涯学習時代に向けて、従来の学校教育のやり方だけでは不十分であることが人々の認めるところとなり、学校教育が子どもたちの自ら学ぶ意欲・態度・能力を養うための、すなわち生涯学習の基礎づくりとしての新しい努力を重ねる一方、それと相互に支えあうかたちでの生涯学習としての少年教育にも、あらためて脚光があてられるようになってきた。ここでは、生涯学習の基礎づくりとともに、成人の生涯学習と同じように、自ら学びたいことを学びたい手段で学ぶなど、生涯学習そのものの実践がめざされている。ここでのポイントは、体験、参加・参画、地域活動、仲間集団、異年齢集団などのもつ「教育力」を生かすことである。

2 体験、参加、参画のもつ教育力

美深町の「フロンティア・アドベンチャー」では、子どもたちが大自然の中で原生活に挑戦する。子どもたちは、そこで、たとえば冬の極寒の中での自然の厳しさなどを体験する。少年期にそういう体験をしておくことは、その人の考え方や生きる態度に、生涯にわたって意味をもつのである。

人間の生涯のそれぞれの段階において、獲得しておくことが望ましい体験を、現代社会はかなり失ってしまっ

ている。人間が、今後、より豊かに生きるためには、そういう体験を意識的に用意しなければならぬ。

もちろん、体験を生かすためには、自らがそれを受け入れようとする意欲と態度が重要である。活動の各局面で、子どもたちの主体的な参加が得られるよう最大限の工夫をこらすとともに、計画段階でも子どもへの参加を考える必要がある。参画は、ひとをワクワクさせる。参画するとき、そのひとは主体的にならざるをえず、自身自身の判断基準などの枠組も鋭く問い直される。このことは、子どもでも同じである。

3 地域・集団のもつ教育力

体験・参加・参画のチャンスにあふれた場として、地域をあらためて見直す必要がある。地域には、本来、人との交流、自然とのふれあい、文化の享受などの豊かな体験があふれている。戸隠村の「中学生招待キャンプ」や妙高村の「山村留学」は、潜在化していたそういう地域の教育力を掘り起こしたのである。

もちろん、これらの事例の他に、地域がそこに住む子どもたちに素晴らしい影響を与えている活動事例も、また、重要である。ただし、そのような地域活動であっても、地域完結型の活動だけのことたりるわけではない。地域の子どもたちが「交流を通して視野を広げ、閉鎖性を打破する」(妙高村)など、地域という豊かな土壌の上に、地域の外からの「新しい風」を吹きわたらせることが、地域活動の重要な要素の一つなのである。

また、かつて地域に健在であった子どもたちのインフォーマルなグループの中の、自発や自治にもとづく相互作用による教育力の意義も忘れることはできない。ここに紹介されている諸事例も、そういう相互作用を意識的にあらためて生み出そうとしているものである。

しかし、それは、子どもたち一人ひとりの個性をうずもれさせるものであってはならない。むしろ、「個の深み」ともいえるべき予測しえない多様性がいきいきと発揮されるようになってないと、集団の中の相互作用の意味は弱くなる。それぞれの事例にも、子どもたち自身の個別な反応が息づいているはずである。

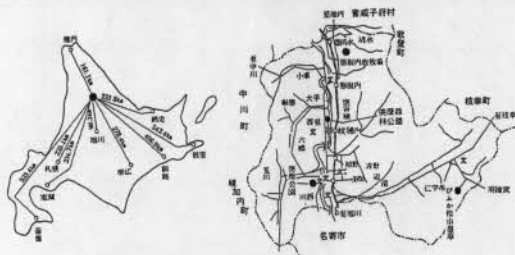
雪の中の自然体験学習

フロンティア・アドベンチャーの里

■北海道美深町

美深町は、北海道の北部に位置し、稚内市と旭川市のほぼ中間にある。人口およそ八千人のその名のとおり美しく人情の深い町である。この町には日本最北端の高層湿原、美深松山湿原、雨霧の滝、森林公園など、めぐまれた自然環境があり、四季を通じて多くの人々を楽しませている。この町が、いま青少年教育を通じて町ぐるみで、地域おこしを図ろうとしている。

これは、町ぐるみで子どもたちの自然体験学習をすすめ、青少年を健全に育成しようとするもの。町の青少年育成協議会が、町内の班溪左の沢の道有林内で毎年実施している青少年自然生活体験推進事業「フロンティア・アドベンチャー」がそれである。この事業は、昭和六十三年の夏にスタート。同年冬にも実施し、以後毎年計画的に行われており、北海道全域から小・中学校およそ八十人が参加している。プログラムは十泊十一日間、大自然の中で原始生活に挑戦するような内容が用意されており、集団生活の中から生きる力、たくましさ、忍耐力、自立心を養ううえでめざましい効果をあげているようである。



特に、雪の中の長期間の自然体験学習は、全国的にも過去に例がなく、その後の夏の事業とともに全国の注目を集め、いまでは「アドベンチャーの里・美深」と呼ばれるようになっていく。この事業には、道内にかぎらず道外からも参加するところから町当局をはじめ、商工会、J R、各種社会教育関係団体が積極的に参加協力して、町外からの小さなお客を歓迎しており、いわば町の名物事業として位置づけられている。

この事業の成果は、地域にとっても大きく、たとえば参加した高齢者、熟年者など生活体験の豊富な人々による新しいボランティアグループが生まれていく。

また、これまで、町内のほとんどの教師は、この自然体験学習に参加しているが、これだけでも全国に例をみない。

さらに、関係機関や団体の関心や連携が深まり、事業の計画、運営を通じて、町民の連帯感が醸成されつつある。従来になく新しいまちづくりとして注目される。

美深の町づくりの目標

1. たくましい多様な産業づくり
2. うるおいとやすらぎのある
快適生活空間づくり
3. いきいき健康福祉社会づくり
4. 未来を開く人づくり・個性
が生きる文化づくり
5. 大自然を保全し、高度に活
かす基盤づくり

文部省補助事業「自然生活への チャレンジ推進事業」

この補助事業は昭和六十三年に始められた。山奥や無人島等の大自然の中で、異年齢構成の少年五十人が十泊もの長期間の原始生活体験を行うもので、現代青少年に欠けるといわれる忍耐や自立心を培おうとするものである。美深の場合は、雪の中の自然体験が特徴的である。

ガールスカウト活動を村おこしの核に

夢は“世界の少女たちの町”

■長野県戸隠村とがくし

「みどりの山戸隠、朝霧晴れて、つどうわれら……」。村の女子中学生と全国から集まったガールスカウトの歌声が聞こえてくる。ここは長野県上水内郡戸隠村にあるガールスカウト日本連盟のキャンプ場である。標高約千百メートル。戸隠村は戸隠連峰、飯綱山、黒姫山に囲まれた「神話の里」として知られている。昭和三十三年、この地に日本のガールスカウト活動のメッカとして「ガールスカウト戸隠キャンプ場」が開かれた。この開設及び運営については地元戸隠村と連携を図っているが、とくに昭和三十六年からガールスカウトによる「戸隠村中学生招待キャンプ」が定着、全国から集まる少女たちと村の少女たちのふれあいが続いている。

現在は中学二年生が毎年参加している。例えば感想文に、「お姉さんたちが歌など教えてくれて楽しかった」「竹でテープルを作ったり、何度も水汲みにいったり、笑って、泣いて、今出てくることばは『楽しかった』」などとあるように、地域の少女たちに影響を与えているようだ。

ガール・スカウト日本連盟

グループワークやキャンプなどを通じて、少女の心身発達に寄与する事業を行っている社団法人。信頼、忠実、友情、礼儀、規律、快活、儉約、純潔などに関する「おきて」と「やくそく」にもとづき、「立派な品性と奉仕の精神を養う」ことをめざしている。

昭和六十三年夏には、国際キャンプに集まった八カ国の高校生ガールスカウトたちが「一日農家体験」と称してグループ単位で農家を訪れ、農作業を手伝った。「一日農家体験」は初めての試みであったため、農家には準備等とまどいがあったものの、その成果は予想以上であったという。少女たちは農家の人々の人柄、親切さ、農業の大変さ等にふれ、戸隠の野菜のおいしさに感激した。農家側も「自分の子どもでも手伝おうとしないのに、ガールスカウトが手伝おうとしてきてくれる。その気持ちもうれしい」と大喜びである。その後も少女たちと農家の相互交流が続いている。

昭和六十年の全国キャンプから、プログラムの一つとして「戸隠村地質化石館を活用しての化石採集とクリーニング」が取り上げられている。四百万年ほど昔の化石を自分の手で取り出した感激は、ほかでは味わうことのできない体験である。

小島村長は「ガールスカウトキャンプ施設があることは、海外にまで戸隠の名を伝えることになりありがたいことです」と語っているが、まさにそのとおりであろう。

計画しただいでは戸隠村が今後、『世界の少女たちの町』になることも夢ではない。村おこしの核として、世界のガールスカウトが一回は訪れる村に発展していったほしい。

信州こども夏休み高原村

戸隠村では、ガール・スカウトとの交流だけではなく、広く一般の子どもたちに自然体験を提供している。それは新しい観光のあり方を示唆するものでもある。具体的なプログラムは、戸隠神社参拝、昆虫採集（みやまくわがた）、ほたる見学、岩魚つかみ、手打ちそば作りなどの体験学習から構成されており、そのどれもが、村内の豊かな教育資源を有効に活用したものである。

自然の教育力を活用

妙高子ども村

■新潟県妙高村

かつては二百名はいた児童が、今は三十数名。県教委の要職を経歴に持つ宮下優は、教職最後の勤務校を山村僻地の母校と定めた。過疎化の著しい部落の活性化が、在職中からの念願であった。

風光明輝な妙高山の麓、二本の清流にかこまれた扇状大地上にある妙高村大鹿部落。古代人の遺跡も多く、山菜や農作物に恵まれた大自然と温かな人情にあふれた土地柄である。ここに都会の子どもを迎え入れたら、という構想が宮下に閃いた。

自然破壊が続き、自然との接触は少なく、心の荒廃の進む都会の子どもたちを、この妙高の自然の中に解き放したい。さまざまな野外活動や勤労体験をさせ、多感な少年少女に自然の美しさ、尊さ、恵みを感じさせたい。山村の持つ教育力を通して、時代の要請である豊かな人間性の育成に寄与し、また部落の子どもたちも交流を通して視野を拡げ、閉鎖性を打破することも可能である。

寂しい老人ばかりの村に、子どもの歌声を響かせたいという願望が山村留学の

妙高子ども村のプログラム

友達をつくり、はたらく、自然を知る、感動する、くふうする、などの「ねらい」のもとに、次のようなプログラムが組まれている。

1日目 「妙高村に集まろう」

(友だちづくり)

2日目 「妙高村ってどんな

村」(妙高村探検)

3日目 「川の生いたち探検」

(清流遊び)

4日目 「ひろい農家で思いき

実現へとかりたてた。

幸いに教え子である村長や教育長、部落の有志の共感を得て、事務局を村の教育委員会内に設置する。子どもの宿泊は大鹿部落の二十の農家が引受けてくれた。

昭和五十九年から始まった山村留学は、当初は人集めのめどが立たず苦勞を重ねた。県の東京事務所、県出身の有力者、知人などを歴訪して協力を要請し、昨年までに、首都圏や県内から延べ七百名の参加者を数えるにいたった。冬は豪雪に交通機関を絶たれた苦い経験から、現在は夏休み中と一年の長期留学を実施している。

日程は妙高山麓の山歩き、遺跡探検、川での水遊び、魚とり。農家では家畜の世話、野菜や山菜の収穫から薬細工、竹細工と、山村ならではの生活である。わずか六日間のあいだに、すっかり遅しく成長して帰っていく。今年もぜひ行きたいという子どもたちの年賀状を見ながら、宮下は夢の実現に老いてますます情熱を燃やすのである。

り働こう、楽しもう」（農家の生活発見）

5日目 （4日目の続き）

6日目 「活動のまとめ」（記録など）

長期山村留学

これも、社会教育団体である「育てる会」との共催で実施されている。内容は次のとおりである。

期間 1ヶ月 対象 3年～6年

留 学 校	妙高村立大鹿小学校（平成2年度から受け入れ）
運営形態 生活形態	妙高村大鹿地区住民と学校が一体となって山村留学を運営指導 全期間里親農家が経験を生かして養育にあたる
特 徴 自然条件 指導・活動 将来展望	里親農家は、子育てに定評があり、夏休みの短期山村留学で十分経験を積み、安心して任すことができる。 妙高の大自然と、そこに生活する農家の人間性豊かな人びとに囲まれて生活し、学校では少人数学習法の教師との触れ合いの中で伸び盛った教習が、なされていく。

10 生涯学習における青年教育の推進

1 仲間や社会との交流によって深まる青年の個

アイデンティティ（同一性）の獲得は、青年期の重要な発達課題である。青年期には、それまで取り結んだ諸集団（家族、同年齢集団、学校）によって獲得したアイデンティティと、青年期以降関係を結ぶことになる成人社会（職場、地域社会）において期待されるアイデンティティとが対立する。少年期に築き上げた「自分らしさ」だけでは、社会には通用しないことが自覚され、「自分とは何か」を模索するのである。その模索のために与えられる猶予期間をモラトリアムと呼ぶ。これは、新しい社会を生み出す原動力にもなるのであり、社会としては、そういう個々の模索を最小限にとどめようとするのではなく、むしろ、モラトリアムが一人ひとりの内面的な世界で十分に意味深く過ごされるよう援助する姿勢をもたなければならぬだろう。

アイデンティティの獲得、いいかえれば、個の確立は、カプセルの中に閉じこもってでは達成できない。他者と触れ合ってこそ、自らの個も深まる。しかし、それはけっして同質集団の形成や、社会への没個性的な順応を意味するものではない。従来の青年教育が、ややもすれば、青年をマス（集団）として扱ってきたのに対して、今後は、青年一人ひとりの多様な個性が発揮される組織化や活動がめざされなければならない。

2 「個の深み」を尊重し助長するための視点

青少年団体の全国的連絡組織である「中央青少年団体連絡協議会」によって設置された「特別研究委員会」の提言、「青少年団体活動は青少年の自己成長にどう関わるか」（平成元年度）は、青少年団体が「個の深み」を追

求するために、次のような視点が必要だとしている。

それは、すでに設定された目的にとつての最適の手段ばかり考えるのではなく、各自が「迷路」の中でさまざまなことを許容すること（目的志向型から迷路型へ）、日常の活動の中で個人個人がいろいろなことを「気づき」「思いつき」さまざまな思いをもつという意味での「学習」を高く評価すること（学習型活動型から活動型学習型へ）、「個の深み」から発したユニークなアイデアを団体運営に反映するために、喫茶店や居酒屋などのような気楽にしゃべれる空間を活用すること（研修会方式からたまり場方式へ）、団体は情報やメニューの提示などをし、各個人がそこから自らの行動を「選択」し、その上でそれぞれの「発見」を披露し交流してもらうこと（一括方式から選択方式へ）、各人のばらばらなニーズに合わせた「注文仕立て」の多様な活動を行うこと、ただし、それを注文した本人が一番熱心にそれに取り組みること（既製服型から注文仕立て型へ）、既成のスローガンにあまり拘束されず、変幻自在に「遊び心」で活動できるようにすること（スローガン型から遊び心型へ）、などである。

3 主体的に企画する、表現する、関わる

本書にあげた事例を支えているのも、メンバーの「個の深み」である。それは必ずしも活動の表面に表れてくるとは限らないが、活動のプロセスの中では重要である。これが、活動全体の個性と創造性を生み出す。

熊本市の「野外教育研究所」の事例では、事業を企画すること自体に、青年は大きな魅力を感じているようだ。渡嘉敷村の青年会活動では太鼓をとおして、鳴子町の喫茶店では書くことをとおして、青年が自分自身を表現している。香北町青年団は、三十人にも満たない団員たちが、町づくりに大きな影響をもたらしている。

青年たちの主体性が失われつつある現代社会において、このような青年自らの手による企画、表現、そして地域や社会への関与が行われていることは、私たちに明るい希望を与えてくれる。

若者のクリエイティブ・オープン・オフィス

“青年の青年による”企画集団

■熊本県熊本市

青少年教育を担当した者にとって、青年の自主的な社会参加活動の集団が育つた時ほどうれしいことはない。

なぜなら、青年期の教育は青年を他律的に育成するのではなく、青年の自由な冒険や挑戦を通じた主体的な活動こそ大事であることを、体験的にも知っているからである。

熊本市西唐人町にある野外教育研究所（代表・山口久臣）は、九州八県が協同事業として実施している「日中友好九州青年の船」事業から育った、青年の青年による“企画集団”である。

この集団のねらいは、「夢・創造・実践」の理念のもとに、青少年を主体とする野外教育・社会教育・国際交流事業等の活動を通して青年リーダーを育成しようとするところにある。

活動としては、①野外活動 ②青少年育成活動 ③国際交流活動 ④レクリエーション活動 ⑤生涯学習活動——の五つを柱としている。また機能として、

企画に関わることの重要性

全国子ども会連合会『中学生—その青春と地域活動—』には、「おしきせプログラムはまっぴら」と題して、次のように書かれている。

「どうも、大人が事前にすべてを準備しきって、ただ子どもは、お客さまで参加するという行事が多かったのではないか。プログラム立案の段階から参画することは、参加意識を高め、苦勞しても、なんとかやりとげ成功させたい、そのために勞をおしまず仲間と協力しあおうとするであろう。その仲間と苦勞をともし、やっとな仕事をなしたとげたあとの成就感を味わったとき、ヤッタという晴れ晴れした気持ちになるであろうし、その

①創造・企画 ②調査研究 ③実践 ④情報センター ⑤事務処理・整理 ⑥商品企画・販売——の六つを持たせ活動している。

さらにこの集団のすばらしさは、昭和六十一年からこの研究所を若者のクリエイティブ・オープン・オフィスとして開放していることである。現在、「くまもと国際青年年をすすめる会」を始め、「熊本市青年団体連絡協議会」「友志灯（ともしび）」など五団体が事務局を置いている。そして事業を実施する時は、各団体の強みを生かして実行委員会を設置し、相互の連携を図りながら事業を展開している。

主な事業としては、昭和六十一年から開始した「日韓友好熊本少年の船」「くまもと雪ん子列車」「くまもと少年洋上教室」（昭和六十三年）、「アドベンチャーキャンプ」（昭和六十一年と）、「青少年リーダーセミナー」（昭和六十三年）等を実施しているが、まさに「青年の青年による」企画ならではの思い切った事業展開がなされている。

今後の活動目標としては「アジア少年の船構想」が計画されているとともに、組織の拡充として法人化への動きも進められており、青年たちの夢は限りなく広がっている。

このような青年の青年による企画集団が各県にほしいと願っている。

時、またやってみようというやる気を育てるわけである」

企画するためには、そのひとは主体的にならざるをえず、自分自身にも鋭く迫ることになる。

自立の意欲と態度を養うべき青年期においては、企画に関わることの意味はより大きいであろう。

慶良間太鼓の響きに^{けらま}乗せて

■ 沖縄県渡嘉敷村^{とかしき}

天地を揺り動かさんばかりの、すさまじい大小十三個の和太鼓の響き。バチを握る青年たちの真剣な顔。決して大きくはない学校の夜の体育館。仕事を終えた若者たちが、ビーンと張りつめた空気の中で、自らの内なる想いをたたきつけているかのようなのである。これは、沖縄県渡嘉敷村の青年会のメンバーによる慶良間太鼓の練習風景である。

この慶良間太鼓、実は決して地元に残る伝統芸能ではない。この青年会のメンバーによる創作物なのである。渡嘉敷村は、ご多聞にもれず、過疎の村である。若者たちは島を離れ、戦前カツオブシで賑わった人口二千人の島が、今は七百人足らず。豊富でおいしい水、美しい海、人情味あふれる観光の村として新たなるアピールを行っているものの、村の若人はUターン組を含め数十人。六十歳以上が五十%近くを占める超高齢社会である。

そんな島に、沸々と生じた若者たちの発信エネルギー。ある会の余興でやった太鼓のまね事が、いつしか慶良間太鼓の創作へと向かっていったという。

青年団（青年会）の歴史

鎌倉時代ごろから各地の村落を中心に形づくられた「若衆組・若連中」にその源があるといわれる。明治時代になって、青年の修養機関や銃後活動組織として評価され、各地に青年会が設置された。

青年団は、戦後の地域の生産・政治の主力部隊の一つになったが、高度経済成長期の頃には、目的志向型のグループ・サークルの方が盛んになった。そして、

「何かやりたかった」と、青年たちは当時を振り返る。当初、球技大会とかいった楽しみ志向のイベントばかりであった活動が、ムラのイメージを一新するような慶良間太鼓という大きな文化創造の活動へと変わっていったのである。演奏は島外にもおよび、来たる九月二十二日・二十三日には県最大のホール、コンベンションセンターで離島フェア'90の一ページを飾ることになっている。さらに、村にある国立沖縄青年の家との交流も盛んで、村をあげての青年の家の祭りでも、勇壮な太鼓の音がこだましている。このように慶良間太鼓は村の中心文化となり、若者によるムラの活性化につながっているのである。

海の自然の営みを五部構成にテーマ化し（夜明け、波・風、嵐、豊漁、落陽）、一時間十分にわたって、海の情景を現出するのである。海と共に生きる島民のまさに魂の叫びとでも呼べようか。「和太鼓のかなでるリズムと音、不思議と一体感を覚えた」と、彼らは言う。全国の青年会活動と同様、課題も多い。しかし、年間延べ二カ月にもほる夜の練習、そんな試練を乗り越える青年たち。きつと素晴らしい将来を切り拓いていくことであろう。

現在では、青年の自主的な活動は、そのどちらもがあまり振るわないといわれている状況だが、地域に直接関わりあいながら、青年自身の生活の課題に総合的に取り組む青年団活動は、新しい存在価値をもっているといえる。

地域住民をスタッフにして

青年団による町づくり活動

■高知県香北町

香北町は高知県の東部山間にある人口六千人あまりの町。六十五歳以上がその三割弱を占めるといふ。『お年寄りの町』である。今この香北町で、数少ない青年たちが希望に満ちた地域づくりに取り組んでいる。

香北町青年団は昭和四十二年に誕生、交通安全、明正選挙・清掃美化・演芸大会・広報などの活動を精力的に行ってきた。中でも昭和五十九年から始まった一連の町づくり活動は、町の内外に一大センセーションを呼び起こした。「自分たちの活動は、ほんとうに地域社会に根ざしたものになっているだろうか」——。そんな問題意識のもとに開いた数回の勉強会を通して、「地域に必要なもの」「自分たちがしなければならぬこと」について、団員一人ひとりが考え始めた。

高知市一番の繁華街へ出かけていって香北町のPRをしたり、町内では「子どもからお年寄りまでが一緒になろう」を合い言葉に、「香北みなこい祭り」や各種コンサートを開催した。いずれも好評であった。昭和六十二年からは

青年団の目的と町づくり

日本青年団協議会綱領では、

- 一 私たちは心身を修練し、よりよき個人の完成に努めます
 - 一 私たちは友愛と共励を信条として団結します
 - 一 私たちは住みよい郷土社会の建設に努めます
 - 一 私たちは人類愛と正義をもって世界平和に努めます
- として、次のスローガンを掲げている。

・平和と民主主義を守り育てよ

「自然と人々の調和」をテーマに、香北町を会場として「物部川遊・裕共和国」を開国、多くの『香北ファン』をつくり出した。

こうした一連の活動の中で、青年団はいろいろな世代の住民にスタッフとして活躍してもらった。青年たちが率先して住民を引っ張り、一人ひとりに町づくりにかかわってもらったのである。三十名にも満たない青年団員たちは、ふるさとに大きな活力をもたらすとともに、これからの地域社会を担う者として貴重な経験を得たのである。

こういった活動は多くの町づくりの芽を生み出した。「地域に活力を与え、子々孫々まで残る伝統芸能を」と創作された蕪生太鼓。その勇壮な響きは住民の新しい誇りとなっている。また「みんなで美しい町をつくろう」と始まった花の里づくり事業では、約四万本のアジサイが国道沿いを中心に植えられている。

今年も四月二十九日・三十日の二日間、「物部川遊・裕共和国」が開国される。「遠く雪国からドサツと雪を運んでこよう」「菜の花で迷路をつくってみよう」と、スタッフ一同で準備に精を出している。

(香北町教育委員会社会教育主事 岡本篤志)

う

・青年の生活と権利を守り、豊かな青春をおくろう

・青年の力で新しい地域づくりをすすめよう

・単位団との一体化をはかり、団員の倍増をはかろう

「郷土社会の建設」や「新しい地域づくり」など、青年団の活動目的の中で、町づくりに関わることがかなり重要なものとして従来から位置づけられてきたことがわかる。

生涯学習をすすめる若者たち

「楽描蝶」のとびかうマチ

■宮城県鳴子町

「楽描蝶」——なるこちよう科

○本種は本邦に特産する最も大型の蝶であり、宮城県鳴子町を発生源とし、棲息地は他地方にもおよび、自由にひらひら飛び回っては新しい仲間を増やしている。

○行動は日没時から深夜にわたるため、産卵・孵化等かなりの生態が不明のままである。

○特筆すべきは、その食性である。夢を常食としながら、それを現実化した糸を吐き、繭をつくる。しかし、本種自身は蛹化しない。蝶には珍しい不完全変態でもある。

……略」

（「楽描蝶」第十四号より）

これは、宮城県鳴子町のある若者たちの発行するミニコミ誌からの抜粋である。一つひとつの記事に、「メッセージ」を送る人々の「優しき」あるいは「熱き」想いが溢れている。肩肘を張らず、自分の想いとベースで、さりげな

く「生涯学習」「地域づくり」を進めているという感じである。

鳴子といえは、「こけしの町」や豊富な種類の「温泉」、「奥の細道」街道などで知られる、宮城県北西部の人口一万一千人強の静かな温泉町である。こんな中で地元の若者たちが、喫茶店「美味小舎」を拠点に、全国各地の人々と交流を深めながら自分たちの地域づくりを始めているのである。

今、全国の市町村で「ムラオコシ」「生涯学習によるマチづくり」が進んでいるが、それはとかく行政側の掛け声だけに終始するものが多いようにも思える。穿った見方をすればこの鳴子の人達のように、自己の存在を常に確認し合えるような地道な活動が、その掛け声に呼応しきれていないのではとも思える。こうした人々とのネットワークが行政との間に張りめぐらされるとき、大きな成果が生み出される。

奥の細道ブームに合わせた「松尾芭蕉の細道紀行三百年・源義経没後八百年記念イベント『遊・湯（ゆう・ゆ）一、一〇〇』をはじめ、「日中交流・民族音楽のつどい」など、着々と彼らの行動の中から交流の輪が広がっている。

現在は第十七号を発刊中。「生きのいいまち、粋なまち、そんなまちに暮し隊、鳴子・楽郷の会」。一人ひとりの顔は見えないが、「発行」という二文字に、これほど目を惹きつけられるのは何故だろうか。

拠点の必要性

青年にとつて、現代社会の管理から一時的に逃避できる「駆け込み寺」のような存在は、貴重である。これをアジール（不可侵の領域）と呼ぶことができる。そこでの自由な空間とネットワーク的な人間関係から、創造的な活動が生み出されるのである。

そういう拠点としては、喫茶店、飲み屋、廃屋、寺、神社などがあげられるが、「青年会館」を新たに設置したり、公民館の一部屋を「青年室」として設定したりする例も見られる。

西武ロフトがとらえた若者たち

イチとクラによるモノの拠点

■東京都渋谷区

先日、数人で若者の街渋谷を訪れ、「雑貨屋イメージの百貨店」、西武ロフトの金谷信之館長の話を聞く機会があった。

当日は雨だったが、実はそれは幸いなことだった。なにしろ、平日の昼間でも、晴れていると相当の混雑が予想され、店内の見学が十分には行えない危惧があったからである。それぐらいロフトは、今の若者を「吸引」している店である。

「生活必需品」に対して、若者が今までと違うものを求め始めている。「非常」の余暇以上に、日常生活そのものを「余暇」として楽しもうとしているのだ。タテワリの商品分類では、このようなニーズに対応できない。領域の間が抜けてしまう。そこでロフトでは、身体、空間、仕事、余暇というようなフロアの設定をしている。

各フロアはそれぞれ、イチ（市）とクラ（蔵）で構成される。「市」は中央にあって、市場のようにエキサイティングである。「蔵」は壁際高くまであって、

若者の街、渋谷

渋谷の街づくりの成功のカギとなったのが、「西武バルコ」である。駅からちょっと歩かねばならず、けっして立地条件がよいとはいえない所、「公園通り」を若者のメッカにしてしまった。他にこの通りには若者の「文化拠点」として「ジャンジアン」がある。これは、教会の地下にある劇場で、最先端の文化活動が行われている。

定番商品がきちつと揃えてある。同じ茶碗が、すべてのサイズが揃っている。商品絞りこみもしない。売場はインデックスであり、選ぶ主役は客、使い方はそれぞれだと言う。

さらに、ロフトはトレンドや風俗をつかまえ、「生活自遊人」という都市生活者のくらし方を提案している。「生活自遊人」とは、個の世界のマインドをもって人のことである。彼らは生活領域が広く、頭の中だけでなく実践をする。

「生活自遊人」はシビアで、買物もしろうとではない。モノを知っている。そういう人をターゲットにするために、ロフトは「高度情報装備性」と「高密度・高集積」を売り物にしている。

実はロフト社員三百二十名中、百名ほどが「モノマスター」である。彼らは社内外公募で選ばれる。あるモノについて、本当に好きで専門的に「きわめている」人たちである。モノを使いこなせるそういう人が、仕入れから始まって、そのモノのすべてに責任を持つのである。

「しろうと」でない学習者が増えてきた今日、それを援助する生涯学習関係職員にも、これぐらいの高度な学習内容への「こだわり」が求められる時代なのかもしれない。

東急ハンズ

渋谷には、東急系のデパートとして「ハンズ」がある。これはクリエイティブライフストアと銘打ち、「手づくり」のブームを生み出した店である。ロフトは、そのすぐ近くにオープンしたのである。